

今年も春のお彼岸^{ひがん}が近づいてきました。お彼岸には多くの方がお墓参りをされることでしょう。

今日は、実際にあったお墓参りでの出来事を二つ紹介します。

一つ目は、大雪の降る真冬の寒さの中でのお墓参りです。六十代後半の母親を亡くしたご家族が、墓地に納骨^{のうこつ}をする供養の日でした。

納骨をして、お花を供える時、そこに来ていた石屋^{いしや}さんが、用意してあったお花を供えようとする「私に供えさせて下さい」と、その家族の娘さんが申し出ました。一本一本の花をいとおしむように、丁寧にお供えされました。雪の降る寒さの中で、とても時間がかかったのですが、厳しい寒さの中でも心温まる思いがしました。それは、亡くなられた母親に対する深い愛情が感じられたからなのでしょう。

二つ目は、晴天に恵まれた春のぽかぽか陽気の中でのお墓参りです。

同じように六十代後半の母親を亡くしたご家族が、母親の遺骨^{いこつ}を墓地に納骨する供養でした。納骨をして、お花などを供える時、石屋さんが「お花をさしましょうか」と声をかけると、その家族の娘さんが「それじゃ、お願いします」とお花を渡しました。結局、石屋さんがお花やお水、お供物などすべて供えることとなりました。そのお墓参りは、温かい日差しに包まれていたのですが、なぜか少し寂^{さび}しい気持ちになりました。

この二つのお墓参りは、納骨のご供養ということもあり、ご遺骨をお墓に納めるため、ご家族の他に石屋さんが同席しているという稀^{まれ}なケースです。

また、なぜそのように感じたのかその時には分かりませんでした。今思えば、それぞれの供養の気持ち^{おこな}が行^{あらわ}いをもって表^{あらわ}されていたからなのかもしれません。

仏さまにお花やお香をお供えすることを「手向^{たむ}ける」と表現します。「手向ける」とは手を向けると書きます。つまり、供養をつとめる方の手で、お供えをすることが大切なのでしょう。

お墓にお供えするお水やお花、お香などは亡き方とご縁^{えん}の深い、自分自身の手やご

家族の手で、心を込めてお供えしたいものです。

そして、お墓参りには出来るだけ家族一緒に出かけましょう。子供たちにお墓参りの作法を伝えて、亡き方の思い出を話してあげてください。ご先祖様からおじいちゃん、おばあちゃんに、そして、お父さん、お母さんへと、さらに自分自身へとつながってきた命を感じることができるでしょう。

生きている私たちは、お墓に眠る亡くなった方々に実際にお会いすることはできません。しかし、お墓参りをする事によって、亡き方へ思いを馳^はせることができます。亡き方の願いとは何か、その願いを受け止めながら生きることは、亡き方と一緒に生きていることに他なりません。

お墓参りができるということは、とても有^{ありがた}難いことなのです。

— 終 —